
THE TEAM！（番外編） ～白真の告白～

緒俐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

THE TEAM！（番外編） ～白真の告白～

【Nコード】

N7492D

【作者名】

緒俐

【あらすじ】

「紫織はいつから白真と付き合ってる？」との疑問から事件は巻き起こる。そして、白真のファンクラブから紫織に魔の手が伸びていて……

箒星学院高等部昼休み、

またまた「カレカノいない同盟」の一言から事件は始まる……

「ねえ、しーちゃん」

「何？」

ポツキーをかじりながら、尋ねられた方向を紫織は向いた。

「色鳥君と付き合い始めたのっていつ？」

「白と？ うーん、確か中一だったかしら」

紫織は古い記憶をたどっていく。

告白の言葉は印象的だったが、

時期はそこまで覚えてない。

なんせ、生まれたときから一緒にいたので、

自然に恋人になっていたというほうが正しいのだ。

「だけど急にどうしたの？」

もつともな疑問に、クラスメイトは溜息をついた。

「それがね、色鳥君のファンクラブがあるでしょう？」

どうもしーちゃんのこと調べてるみたいなのよ。

翡翠ちゃんみたいに呼び出しとかかからないといいけど……」

「心配しなくてもいいだろう？ 紫織は空手三段だぜ？」

快が話しに割って入る。

今日の休憩時間は修と将棋。
お互いに一步も引かないあたり、
この勝負は夜まで持ち越されそうだ。

「だけど、もしもってことがあるでしょう？
そのときどうするつもり？」

鋭い指摘だが、快は平然として答えた。

「修、少し待った。だから心配要らないって。
どうせお前らが動くし、俺達もいる。
何より白のやつが俺たちより早く片付けるさ」

危機感などない。

なんせ、長年の付き合いで白真がどれだけ紫織のことを思っているか、

想像しただけでも怖い。そう、怖いのだ……

「まったく、TEAMは危機感の欠片もないのかしら……」

そして放課後……

「やあっ！」

道場には紫織の声がこだます。
先輩相手にも何のその、快勝だ。

「さすが美原だな」

「ああ、美人だし、才女だし、しかも空手三段！」

白の奴が羨ましいぜ」

隣で練習している合気道部の男子からは、
憧れのマドンナ的な言葉が漏れる。

「だけどよ、最近白のファンクラブが怪しい動きをしてるらしいぜ」
「それ本当ー!!」

翡翠がひょっこり現れた。彼女は合気道部である。

「本当だったら教えて！
紫織のピンチは私のピンチなの！」

親友思いの彼女は食い下がる。

「それがさ、あいつら美原を待ち伏せしてやっちまおうってことらしいぜ。」

しかもバスターまで雇ったって噂だよ」

それを聞いたとたん、翡翠はすぐに飛び出した。
バスターが相手となれば、さすがの紫織も手加減できなくなる。
その前に自分が片付けてしまうしかない！

「美原紫織か？」

声をかけられた方向にはバスターと思われる男達と、
ファンクラブの女子たち。

「違うわよ、だけどその子も邪魔なの。やって頂戴」

いつか翡翠を呼び出した上級生。

白の彼女は自分だと勘違いされたこともあった。だが、いつも紫織が簡単に片付けてくれていた。自分のやさしさを知っていてくれたから……

「そうか。まっ、可愛ければ問題ないかな」

ぞろぞろと翡翠のほうに攻め寄ってくる。

「私はTEAMのバスターよ！

バスター相手には手加減しない！」

翡翠はさつと構えると、男達は爆笑した。

「はっはははははは！！！！ あの「TEAM」のか！！
その程度の覇気で何ぬかしてやがる！！」

翡翠に振り下ろされたこぶしは簡単に空を切り、

「やっ！！」

男は十メートル近く投げ飛ばされた。

合気道部であることを、これほど感謝したことはない。
手加減をまだすることができるからだ。

「このアマツ！！」

すべて言い終わる前に飛び蹴りが入る。

「紫織！！」

「翡翠！！　ダメでしょ！！　治療兵がこんな奴ら相手にして、もし怪我でもしたらどうするの！！」

「だって、紫織がピンチだっていうから！」

涙目になって翡翠が言うと、

「大丈夫よ。「TEAM」に手を出したこと以前に、翡翠に手を出したこいつらに思い知らせてやらなくちゃね……」

そのときの形相に、翡翠以外のものが悪寒を感じた。

「当分、私達に手出しできないようにしといてあげなくちゃね！」

そして紫織の周りに無数のナイフが出現する。

「ちょっと待てよ……！！」

この女まさか「アートの女王」か！！」

「間違いねえ！！　最悪だ！！」

「アートの女王」。それは紫織の掃除屋界での通り名だ。

とある空間に仕舞いこんであるさまざまな武器を、自分を取り出したいときに取り出して戦う換装士。

特に紫織は趣向を凝らした戦いをするので、その名がつけられたのである。

「その通り。タイトル「死の彫刻」！！」

「ぎゃああああ！！！！」

そして帰り道……

「まったく……随分ひどいことやったな」

「ごめんごめん、ついね」

快の苦勞を一つ増やしたことに對して、

紫織は軽く謝った。

「だが、翡翠も無茶すんなよ。

お前は大事な治療兵なんだからよ」

「ごめんなさい」

傍から見れば間違いなく告白にも取れないこの言動。
しかし、翡翠がそれに気づくわけもない。

「それと、紫織に一つだけいっておきたいことがある」

「何？」

「白とお前が付き合い始めたのは中一の五月十三だ。

白の奴に昼間の会話言ったら嘆いてたぞ」

おそらく泣きついたに違いない。

快の制服がなんとなく詩話になっている気がする。

「そつか……だけどね、

日にち以上にあいつの告白の言葉のほうが印象的だったのよ」

「何って言ったの？」

わくわくしながら翡翠はその言葉を待つ。

快もそれは聞いてないのか耳を傾けた。

「あいつね……」

「はくしゅ!!」

「何だ？ 風邪か？」

剣道の防具を脱ぎながら修が尋ねる。

「いや、紫織が俺のことを惚気てるだけだ」
「さいですか」

悪友の惚気などさらさら修は興味ない。

「だけど、翡翠が今日も紫織と間違えられて絡まれたみたいだからさ、

ファンクラブの雇った掃除屋をつぶしにいかねえとな」

怒ってる！ 穏やかに言ってもキレてる！

修は今宵も快の苦勞が増えそうだと溜息をつく。

「だからさ、紫織に伝言頼むよ。」

『告白の日は忘れても、俺の誕生日だけは覚えてろ!』って」

白真の誕生日は五月十三日だった……

（後書き）

今回は紫織ちゃんの話を書いてみました！
ただし、恋愛というより友情の話ですね・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7492d/>

THE TEAM！（番外編） ～白真の告白～

2010年10月21日07時30分発行